陳宮と曹操

小松　建男

1　はじめに

『三国志演義』の作者は、なぜ陳宮を曹操の同行者にしたて、曹操が呂伯奢を殺すという事件を目撃させたのであろうか。曹操による呂伯奢殺しは、『三国志』注に三種類の伝承が引用されているが、いずれも陳宮の名はでてこない。また、「数騎」を従えていたと書いてあるものもあるが、小説のように曹操が誰かと二人連れであったはどれも言っていない。この事件は、有名な「寧我負人、毋人負我」という曹操の台詞がでてくることもあり、『三国志演義』における史書の利用の例としてよく取り上げられる[1]。しかしそれらは、『三国志』と『三国志演義』の記述の比較か、『三国志演義』が史書の記載をどのように利用しているかの分析で、史書にないこと、つまり曹操が陳宮という同行者と二人で事件を起こしたとされていることについて、なぜそのように設定を変えたのかは、あまり興味を持たれたことがない。しかし曹操の同行者として陳宮を設定したことこそ、『三国志演義』における呂伯奢殺しの最も重要な設定変更であると、筆者は考える。このことを、呂伯奢殺しについて、『三国』の記載、同行者が果たす役割、同行者に陳宮を選んだ理由の順に検討を加えて明らかにしてみたい。

2　史書の記録

後漢の霊帝崩御の年である中平六年（AD189年）に、曹操は、董卓の野望に加担させられることを恐れて、洛陽の都を脱出し故郷に帰った。この逃避行について正史『三国志』本文は、次のように述べている[2]。

京都大乱、卓表太祖為驍騎校尉、欲与計事、太祖乃変易姓名、間行東帰、出関、過中牟、為亭長所疑、執詣県、邑中或竊識之、為請得解、卓遂殺太后及弘農王、太祖至陳留、散家財、合義兵、将以誅卓。

裴松之は「間行東帰」の箇所に注をつけ、この逃避行の間に曹操が呂伯奢を殺すという事件があったことを報告し、三つの異なる文献を引用している。各文献の冒頭にａ、ｂ、ｃをつけて区別して示すと次のようになる。

ａ 魏書曰、「太祖以卓終必覆敗、遂不就拝、逃帰郷里。従数騎過故人成皋呂伯奢。伯奢不在、其子与賓客共劫太祖、取馬及物、太祖手刃撃殺数人。」
ｂ 世語曰、「太祖過伯奢。伯奢出行、五子皆在、備賓主礼。太祖自以背卓命、疑其図己、手剣夜殺八人而去。」
ｃ 孫盛雑記曰、「太祖聞其食器声、以為図己、遂夜殺之。既而悽愴曰、『寧我負人、毋人負我。』遂行。」

曹操が呂の一家を殺したという一事については、三者とも認めている。異なるのは、殺してしまった理由である。もしａの言うように呂の家族が実際に曹操のものを奪おうとした（「共劫太祖」）ためにおこったのであれば、非は彼らにある。またｂ・ｃの言うように、それが単に曹操の猜疑心（「疑其図己」）のなせるわざであれば、彼が責めを負わねばならない。

ａは王沈の『魏書』である。この文献について『晋書』の「王沈伝」では、次のように評している[3)]。

正元中、遷散騎常侍、侍中、典著作。与荀顗、阮籍共撰魏書、多為時諱、未若陳寿之実録也。

「正元中」（AD254-256年）なら曹操の死から三十年ほどしかたっていないので、当時呂の事件も事実に近いものが伝わっていたかもしれない。ただし、まだ魏の御代であるので、逆に「多為時諱」、つまり近すぎるが故の遠慮せざるを得ないこともあったらしい。

ｂは郭頒の『晋魏世語』。彼について『世説新語』「方正」の注に次のような紀事がある[4)]。

郭頒西晋人、時世相近、為『晋魏世語』、事多詳覈。孫盛之徒皆采以著書。

郭頒の生卒年は不明であるが「西晋人」とあるので、王沈より少し後の人であろうか。また、ここで『世語』を利用したと言う「孫盛」は、ｃの著者のことなので、呂の話は、結局aとｂの二説に整理できる。

成立年から言えば、王沈が最も事実を知りやすい立場にいたと思われるが、事件の当事者の説明は、利害が絡む故に、かえって信用できないことがあるように、曹操にとって都合のよすぎる王沈の説明も、事件の当事者の一方に寄り添って生きている以上、そのまま信じることはできない。

『世語』は、呂の事件について曹操に不利な記録を残しているが、この著者が曹操にたいし悪意を持っていたとは思えない。この事件の後に、曹操は中牟で亭長によって拘束されるのであるが、『三国志』では、知り合いのおかげで助かったと言うのみである（「邑中或竊識之、為請得解」）。この箇所に注は『世語』を引用している。

世語曰、「中牟疑是亡人、見拘于県。時掾亦已被卓書、唯功曹心知是太祖、因白令釈之」

『世語』によると、曹操が助かったのは、知り合いのおかげではなく、県の役人の中に今の時代に彼のような英傑を捕らえることをよくないと考えた人間がいたから（「以世方乱、不宜拘天下雄儁」）である。これは、この時から既に後に大業を成し遂げることを十分予見できる人物であったといっているわけで、曹操を漢王朝の簒奪者としてではなく、天下の混乱を静めた英雄と見なした記述である。

郭頒が、『世語』を書いたのは、陳寿が『三国志』を書いたのとあまり変わらない時期と考えられる[5)]。とすれば陳寿と郭頒の二人は、中牟での曹操が助かったのは、知り合いのおかげでと言う説と、曹操を天下の英雄と見抜いた人物のおかげで助かったという説どちらを選ぶことが可能であったはずであり、二説のどちらを選ぶか、あるいは信じるかは、その人柄による。

郭頒は、中牟の話についての選択から想像するに、批判的にものを見る人ではなく、素直に信ずる人であり、呂の事件も当時の人々の標準的な曹操像を伝えているのではないかと思う。むしろ魏を正当とする立場で『三国志』を書いたはずの陳寿が、『世語』が伝える話を、恐らく知っていたはずであるのに、採らなかったのは、彼が資料の扱いに慎重な良心的歴史家であることをしめすものであろう。

もとより呂の事件について『世語』の伝える話が、西晋時代に信じられていたとし

ても、それが事実であり、王沈の伝える話が虚偽であるとはなお決め難い。ただこの事件について陳寿は沈黙している。呂の事件について、彼も王沈や郭頒と同じ話は知り得たと思われるのに。おそらく良心的な歴史家である彼には、より古い記録ではあっても、王の話は信を置き難く、さりとて『世語』の話を採るにははばかりがあったのではないか。今となっては、事実は極めがたいが、『世語』の話の方が、事実に近い可能性は高いのではないかと思われる。

ここまでcの孫盛『雑記』については、『世語』の話を踏襲変形したものということで、取り上げずにおいた。しかし事実か否かを離れてみるとき、『雑記』の曹操像は三つの記録の中で最も優れいる。

呂の家族を殺した後、『雑記』の曹操は、有名なせりふ「寧我負人、毋人負我」を口にするのであるが、それは殺害後すぐにではなく、少しの間（「既而悽愴」）があって後に発せられる。『雑記』の曹操は、自分が殺してしまった人々を前に、何を思ったのであろうか。おそらく親しい人さえ疑わなければならない時代と、そのような時代に生きているとはいえ、人を信じることができず殺してしまった自己へのやりきれなさであったに違いない。そしてその後あらためて、「おれは後悔なんかしないぞ」と自分に言い聞かせるために、あるいは「これからはこのように生きてゆくんだ」と決心して上記のせりふが続く。

これこそ曹操という一人の青年が歴史上の曹操に生まれ変わる、精神の大きな旋回の瞬間であって、三つの記録の中では最も事実から遠いとしても、生き難い世を生きねばならなかった人の真実の姿を最もよく伝えているように思われる。フランスのモラリスト、ラ・ロシュフコーはやはり生き難い時代を生きて「友を疑うのは友に欺かれるより恥ずかしいことだ」[6] と言う言葉を残している。西と東、時代も異なり、言うところは正反対であるが、言葉の背後にある思いはさほど隔たっていない。

3　同行者の役割

『三国志演義』の場合、呂伯奢殺しは、陳宮という同行者を付け加えたために、それだけでは完結した話とならず、曹操が陳宮と出会ったことに始まり、二人が袂を分かつことで終わる話に拡張された[7]。

陳宮を事件の同伴者とするために作者は、二つの操作をしている。まず中牟で曹操を助けた県令を陳宮にしたこと、もうひとつは、県令が曹操を助けた話と曹操が呂伯

奢を殺した話の順序を逆にしたことである。話の順序を変えたのは作者の勘違いによるものではなく、意図的なものである。曹操は洛陽から陳留へ、つまり西から東へ逃走しているので、通過する順序は成皐（呂伯奢の住んでいる土地）→中牟（県令のいる土地）である。また仮に作者が二つの土地の位置関係を知らなかったとしても、『三国志』は呂伯奢の話を、中牟の話の前の注で扱っているので、そのまま読めば、呂伯奢殺しの一件が、中牟に着く前であったことはすぐ分かる。

中牟において、逆賊董卓の暗殺に失敗に故郷に逃れる途中の曹操は、捕らえられた。夜に県令に呼び出され、奸臣董卓を討伐するため故郷に帰り義兵をあげるつもりだったと言う。すると、県令はここではじめて自分は陳宮だと名のり、あなたこそ「天下忠義之士」だ、自分もあなたとともに大事を謀りたいと申し出て曹操と二人で逃走してしまう。以下は曹操と県令（陳宮）の会話の部分である。

> 至晩県令引親隨人、取出曹操於後院。問之、「我聞丞相待你甚厚。何故自取其禍。」操曰、「燕雀安知鴻鵠之志哉。汝既拿住、便当解去請賞。何必多問。」県令曰、「汝休小覷我。我亦有沖天之志。奈何未遇其主耳。」操曰、「吾乃相国曹参之後。祖宗四百年食漢禄矣。不思報本、与禽獣何異。吾屈身而事董賊者、実欲与国家除害耳。今事不成、此乃天意也。」県令曰、「孟徳此行将欲何往。」操曰、「吾帰郷中發矯詔於四海、使天下共興兵誅董卓、吾之願也。奈何天不従之。」県令聞之、乃親釈其縛、扶之上坐、酌酒再拝曰、「公乃天下忠義之士也。吾棄官而従之。」操問姓名。県令曰、「某姓陳、名宮、字公台。老母妻子、皆在東郡。宮願従公。更衣易馬共謀大事。」是夜收拾盤費、陳宮与曹操、各背剣乗馬、投故郷来。

この箇所で、県令陳宮は、はじめ曹操の敵対者として現れ、最後に彼の同志となって危難をともにすることを決意する。陳宮の心の変化は、曹操に対する呼称の変化になってあらわれている。はじめ曹操を「你、汝」と呼んでいたのが、「吾屈身而事董賊者、実欲与国家除害耳」という言葉を聞いて「孟徳」とやや鄭重になり、董卓討伐の兵を募ると聞くと、曹操を上座に据えて「公」と呼ぶ。『三国志演義』におけるこの時までの曹操の行動と発言は、公平に見て確かに「忠義之士」である。天下のために働きたいと思っている陳宮が、この場の曹操の言葉を聞き、それを信じた。ここで逃走者は曹操一人から、陳宮を加えた二人になる。

a　同行者から見た事件の顛末

このような話の拡張はあっても、呂伯奢殺しが、この話の山場であることにかわりはない。しかし曹操の同行者を登場させたことで、我々は、この事件を、史書の時とは大きく異なる仕方で体験することになる。

曹操が董卓暗殺に失敗し単身逃走したときから、県令による尋問されるまで、我々は、追われる曹操の目を通して事件を体験するしかなかった。しかし陳宮が逃避行に加わった時から、我々は陳宮の視点からものを見るようになる。このことは、二人の間に対立はない逃避行の初めのうちは、あまり意識されないが、二人の考えが対立したとき、我々は自分がいつのまにか陳宮の視点から事件を見ていたことに気づくはずである。

成皐についた陳宮と曹操は、呂伯奢の家に泊まることになる。

三日至成皐、天色向晩。操以鞭指林深処、而言曰、「此間有一人、姓呂、名伯奢、是吾父親拝義弟兄。就往問家中消息、覓一宿、若何。」宮曰、「最好。」二人到荘門下馬、入見伯奢下拝。奢曰、「我聞朝廷遍行文書、捉你太緊、你父避陳留去了。賢姪如何到此。」操告以前事、「今番不是陳県令、已粉骨碎身矣。」伯奢拝陳宮曰、「小姪若非使君、曹氏滅門矣。」言罷与操曰、「賢姪相陪使君寛懐安坐、老夫家無好酒、容往西村沽一樽以待使君。」言訖、上驢去了。

ここで陳宮（＝我々）は、呂が曹操の父の「義兄弟」であること、既に手配書は全土に回っていること、歓待のために呂が酒を買いに行く（「沽一樽以待使君」）ことの三つを知る。

呂の家についてほっとしていると、しばらくして、なにやら不穏な動きがある。

操坐久、聞荘後磨刀之聲。操与宮曰、「呂伯奢非吾至親、此去可疑、当竊聴之。」二人潜歩入草堂後、但聞人語曰、「縛而殺之。」操曰、「不先下手、吾死矣。」与宮抜剣直入、不問男女、皆殺之、殺死八口。

まず刃物を研ぐ音がする（「磨刀之声」）。曹操まで「肉親というわけではないし（非至親）、酒を買いに行くというのも怪しい」などと不安になるようなことを言

う。確かに、呂は手配書が回っていると言っていたから、二人がお尋ね者であることを既に知っているわけだし、酒を買うと称して外出してしまったことも別の意図（引き留めておいて役人に通報しに行く）があるのではと疑念がきざしてくる。そこでこっそり様子をうかがうと、「縛而殺之」と言うのが聞こる。ここで疑念は確信に変わり、恐怖に駆られ、やられる前にやってしまえと皆殺しにしてしまう。ここまでが前半部となる。

後半部に入ると事態は一転する。

搜至廚下、見縛一豬欲殺。陳宮曰、「孟德心多、誤殺好人。」操曰、「可急上馬。」

悪人をかたづけ、これで一安心と思いよく見てみれば、なんと、「縛而殺之」は豚のことだった（「見縛一豬欲殺」）。ここで真実が初めて明らかになる。二人は猜疑心から善人を八人も殺してしまったのである。先ほどの酒を買ってくると言う言葉を信じていれば、料理の準備と考えられたかもしれない物音を、追われる不安から邪推をして、とんでもない過ちを犯してしまったことを知る（「孟德心多、誤殺好人」）。

あわててその場を逃げ出すと運悪く、酒（「酒二瓶」）と肴（「果木」）を買って帰ってきた呂伯奢とあってしまう。

二人行不到二里、見呂伯奢驢鞍前鞽懸酒二瓶、手抱果木而来、伯奢叫曰、「賢姪何故便去。」操曰。「被獲之人、不敢久住。」伯奢曰、「吾已分付宰一豬相款、使君何憎一宿。」操不顧、策馬便行。又不到數歩、操抜剣復回、叫伯奢曰、「此来者何人。」伯奢回頭看時、操将呂伯奢砍於驢下。宮曰、「恰纔誤耳、今何故也。」操曰、「伯奢到家、見殺死親子、安肯罷休。吾等必遭禍矣。」宮曰、「非也。知而故殺、大不義也。」操曰。「寧使我負天下人、休教天下人負我。」陳宮默然。

何も知らぬ呂の善人ぶりに、たまらず陳宮は一刻も早く立ち去ろうとするが、曹操はもどって呂伯奢を殺してしまう。さっきのことはまだ言い訳ができるとしても、なぜ呂伯奢まで殺すのかと問いつめると、これに対する曹操の返事は冷酷なもので、もはや「おれが天下の義士と見込んだ男はこんなやつだったのか」と沈黙するしかなく

なってしまう。

この日の夜陳宮は、曹操は善人（「好人」）と思ってついてきたのにとんでもない男だった（「狼心狗行之徒」）、生かしておいてはためになるまいと考え、殺そうとするが、お国のためについてきたのだ、殺してしまっては道に外れる（「我為国家跟他到此、殺之不義」）と思い返し、一人立ち去り、その後死ぬまで曹操に敵対し続ける。

b　同行者のはたす役割

呂伯奢殺しの場面に、陳宮という同行者が必要であった理由は、読者にも一登場人物の目で事件を見させたかったからである。これによって読者は、その時点で起こっていることを、陳宮と同じ不確かな情報によって判断せざるをえなくなる。作者の側から言えば、情報を制限することで、落とし穴をもうけ読者を欺くことが可能になる。

呂伯奢殺しの前半は、もっぱら陳宮が耳にしたことに情報を限定し、今おこっていることについて、二つの解釈が可能であり真偽を決定できない状態を作りだす。陳宮は、呂伯奢とその家族を見たはずである。人の良さそうな老人であったとでも書いてあれば、我々の呂伯奢たちに対する信頼は益したはずであるが、なぜか作者はそれを書こうとしない。

はたして呂伯奢とその家族は善人なのであろうか。呂と初めてあった陳宮は、曹操の言葉を信じるしかない。ところが、肝心な曹操が「吾父親拝義弟兄」だからとはじめは信用していたのに、あとで「非吾至親」と疑い出す。確かに義兄弟というのは、他人（信じられないもの）と身内（信じられるもの）という二分法にうまく当てはまらない境界線上の存在である。平時ならともかく追われる身となった今、どこまでを身内として信じられるのか。このような迷いの中で、呂の家族の出す音と声（「磨刀之声」、「縛而殺」）を聞きつけたとき、善人のように見えたが呂伯奢の先ほどの言葉（「容往西村沽一樽以待使君」）は偽りであり、自分が「忠義之士」と信じてついてきた曹操の言葉（「非吾至親」）がやはり正しかったと考えた。

後半は、前半とは対照的に陳宮が見たことが中心になり、これまでに耳にしたことの真偽が全て明らかになる。彼の判断はすべて誤りだった。呂家の人々は善人であった。最初に目にした縛られた豚は、呂家の人々が善人であり、もてなしの準備をして

いたことを明らかにし、酒と肴を買って帰ってきた呂の姿は、さかのぼって陳宮と初めてあったときの呂の言葉と、関連づけられ、彼の善良さを浮き彫りにする。一方彼が「忠義之士」と信じて職をなげうってまでついてきた曹操は悪人であった。呂家の人が善人であったと知った陳宮は、「孟德心多、誤殺好人」と後悔する。ところが曹操は、その後呂伯奢まで殺してしまい、そのことを「大不義」と非難すると、「寧使我負天下人、休教天下人負我」と言い放つような人物であったことを知り沈黙するしかなくなる。

この陳宮の沈黙が、この話に陳宮が必要なもう一つの理由である。これまで同じ志を抱きともに行動していると見えた二人が、呂の家族を殺してしまった時点から、行動も考えも尽く対立するようになる。その対立の頂点がこの沈黙である。『雑記』では、曹操の有名な台詞「寧使我負天下人、休教天下人負我」の前に「既而悽愴」というためらいの時間があったが、小説の曹操にはそれがない。このため、同じ台詞でありながら両者が伝えようとしている曹操像は正反対のものである。小説で、「既而悽愴」に相当するのは、恐らく陳宮の沈黙である。つまり小説は、『雑記』の曹操のもっていた「既而悽愴」と感じる心を、彼の中から取り除き、陳宮という他人に転移させしていると考えられる。

この箇所の対比を効果的にするため、作者は伏線を張っている。陳宮は繰り返し「義」を口にし、行動もそれにふさわしい。彼は、はじめ曹操を「忠義之士」と信じ県令という地位を捨て逃避行に加わる。曹操が呂伯奢を殺すのを見て、「不義」であると非難する。夜になり、このような男は殺した方が世のためと思ったが、それでは「不義」、つまり曹操と同じになってしまうと思い返し袂を分かつ。曹操の有名な台詞に、このように一貫して「義」の人である陳宮の沈黙が対置されることで、中牟で捉えられたときは立派なことを言っていた曹操が、実は陳宮の言葉を借りれば「狼心狗行之徒」にすぎないことが明瞭に浮かび上がってくる。

4　同行者が陳宮である理由

曹操に同行者を付け加えたことが、呂伯奢殺しにおける『三国志演義』のすぐれた工夫であったことは、前節で明らかにしたが、ではなぜそれが陳宮でなければならなかったのであろうか。

陳宮を呂伯奢殺しに関連づける記述は、『三国志』や『三国志平話』という『三国

志演義』以前の文献に見えない。陳宮が、はじめ曹操に仕えたこと、その後呂布に使えたこと、曹操に捕らえられ潔い最期を遂げたといった、主要な経歴は、『三国志』の段階で既に確定しており、『三国志平話』も『三国志演義』もこれを踏襲している。しかしなぜ曹操のもとを離れたのかについては、三者それぞれ異なる説明をしている。

『三国志』では「呂布伝」注[8]に、陳宮の最後を伝える記載がある。陳宮は、はじめは曹操のもとにいたが、後に疑いを抱き（「始隨太祖、後自疑」）呂布のもとに走ったとあるだけで、疑いの具体的内容はわからない。

魚氏典略曰、「陳宮字公台、東郡人也。剛直烈壮、少与海内知名之士皆相連結。及天下乱、始隨太祖、後自疑、乃従呂布、為布画策、布毎不従其計。下邳敗、軍士執布及宮、太祖皆見之、与語平生、故布有求活之言。太祖謂宮曰、『公台、卿平常自謂智計有餘、今竟何如。』宮顧指布曰、『但坐此人不従宮言、以至于此。若其見従、亦未必為禽也。』太祖笑曰、『今日之事当云何。』宮曰、『為臣不忠、為子不孝、死自分也。』太祖曰、『卿如是、奈卿老母何。』宮曰、『宮聞将以孝治天下者不害人之親、老母之存否、在明公也。』太祖曰、『若卿妻子何。』宮曰、『宮聞将施仁政於天下者不絶人之祀、妻子之存否、亦在明公也。』太祖未復言。宮曰、『請出就戮、以明軍法。』遂趨出、不可止。太祖泣而送之、宮不還顧。宮死後、太祖待其家皆厚於初。

また『三国志平話』の陳宮最後の場面[9]にも彼と曹操との関係に言及がある。

衆將拿住、把呂布囚了。曹操使人高叫八將並衆官等都來受降。曹操班師、入寨升帳而坐、問衆官、令人將呂布、陳宮執於當面。問陳宮曰：「爾先歸我、後投公孫瓚、又私遁奔呂布、今事失如何。」陳宮笑曰：「非某之過。先殺丞相、常懐簒位之心、後見公孫瓚為事舛訛、再投呂布。怎知賊子反亂。今日被捉、惟死者當也。」操曰：「免你如何。」陳宮自言：「不可。先投公孫瓚、又歸呂布、再投丞相、後人觀我無義、自願就死。」丞相言：「當斬陳宮、放其家小。」陳宮高叫「丞相錯矣。倘留其子、必遺後患。惟母與妻、願言寛恕。」曹操令斬訖、留其母妻。

この陳宮の台詞を見ると、「常懐簒位之心」という言葉があるので、彼が曹操のも

のを離れたのは、曹操に帝位簒奪の心が有ったことが原因らしいことは推測できるが、『三国志平話』の中に彼が曹操のもとを離れたことを描いた場面は存在しない。『三国志平話』の背後には、元代に口承芸能として語られていた三国志説話が存在している。恐らく語られた三国志説話のほうが、書物化された『三国志平話』より内容は詳しかったであろうから、説話の段階では曹操と袂を分かつ陳宮の話が存在し、『三国志平話』がそれを書き落とした可能性も考えられるが、平話のここの台詞から見て、それは呂伯奢の話と結びつかないことは確かである。

では、『三国志演義』の作者が、なぜ陳宮を呂伯奢殺しに組み込み、彼と曹操の因縁の始まりとしたのかといえば、それはやはり彼の最後のと関係があると思われる。

『三国志演義』では、陳宮の最後を次のように描いている[10]。括弧でくくった曹操についての論評は、割り注であるが、見やすくするために改めた[11]。

押過陳宮來。操問曰：「公臺自別來無恙。」宮曰：「汝心術不正、吾故棄之。」操曰：「吾心不正、爾如何事呂布。」宮曰：「布雖無謀、不似你詭詐姦雄也。」操曰：「公臺自謂足智多謀有餘、今竟如何。」宮顧呂布曰：「但此人不從吾言。若從吾言、亦未必被擒也。」操笑曰：「今日之事當如何。」宮大聲曰：「爲臣不忠、爲子不孝、死自甘心也。」操曰：「卿如是、奈老母如何。」宮曰：「吾聞將以孝治天下者、不害人之親。老母之存亡、在於明公也。」操曰：「若卿妻子何如。」宮曰：「吾聞施仁政於天下者不絶人之祀。妻子之存亡亦在於明公也。」操有留戀之心。宮曰：「請出就戮以明軍法。」遂歩下樓、牽之不住。操起身泣而送之。宮並不回顧。臨行、操與從者曰：「送公臺老母妻子回許都吾府中恩養。怠慢者斬。」（後曹公養其母、嫁其女待之甚厚。此乃曹公之德也。）宮聞不言、伸頸受刑。衆皆下涙。操以棺槨盛之、遷葬許都。

『三国志平話』が描く陳宮の最後は、彼の毅然とした態度だけが強調されていたのに対し、『三国志演義』は、むしろ元に返って『三国志』の記述に忠実で、曹操の心が徐々に変化してゆく様子にも注意を向ける。前半を見ると、曹操はずいぶんと悪意をもって陳宮に接している。とらわれの身となって引き出された陳宮に真っ先にかける言葉として、『三国志演義』は、『三国志』にはなかった「公臺自別來無恙。」という台詞を追加し、曹操の底意地の悪さを強調する。しかし、後半になると曹操の心は揺らいでくる。『三国志』に「太祖未復言」とあるところを、作者は、「操有留戀

之心」で置き換え、曹操に迷いが出てきたことを我々に伝える。曹操の心の迷いに気づいた陳宮は、その好意に背を向けるように「請出就戮以明軍法。」と言いすて、自ら刑場へと歩いてゆく。その後ろ姿を見送りながら曹操は涙を流し、家来に陳宮の老母妻子を鄭重に保護せよと命ずる。これを「老母妻子のことは心配するな」と直接陳宮に言わないのは、恐らくそれでは陳宮の潔い最期を汚すことになると考えた曹操の思いやりである。また陳宮も曹操の気持ちを知り、聞き無言で首をさしのべる。

この『三国志演義』の描く陳宮の最後は、『三国志』の記述を作者の解釈によっていささか敷衍したものにすぎないとも言えるが、陳宮の一貫して変わることのない姿の潔さとともに、割り注にも「此乃曹公之徳也」とあるように（これが後人の評か作者の自注か不明であるが）確かに曹操の人間としての暖かみも感じさせる場面となっている。

このように陳宮と曹操の関係をこのような印象的場面で終わらせた作者は、二人の関係のはじまりも、単に以前陳宮は曹操の配下であったが故あって立ち去ったといった程度のものではなく、もっと因縁深いものにしたいと思ったに違いない。曹操が悪人としての本性をはじめてみせる呂伯奢殺しという重要な事件にはじめて登場し、曹操と決別した理由がこの事件を目撃したためとというのは、読者に強い印象を残すには最もふさわしい場所である。

作者が、このような終わり方をする陳宮と曹操の関係を、単に昔曹操に陳宮が仕えていたとのみしたくないと考え、特別な情況を設定したいと思うことは十分考えられることである。

『三国志演義』を見ると、呂伯奢殺しと陳宮の最後を除けば、陳宮は、知謀の人として描かれていることが多く、この二箇所だけが、彼の「義」の人という側面を強く打ち出しおり、やや異質である。また注意してみてみると、陳宮の最後と呂伯奢殺しには、意図的と思われる対応関係もある。まず、呂伯奢殺しでは、県令陳宮が指名手配になっていた曹操を尋問し、その志に感動して助けるが、陳宮の最後では、逆に曹操が敵の参謀となっていた陳宮を尋問し、こちらはためらいながらも処刑するというように、似た状況設定と異なる結果が設定されている。そして呂伯奢殺しで、陳宮は「老母妻子」は別のところに居るから安全といっているが、陳宮の最後では、曹操が彼に「老母妻子」のことを尋ね、結局保護するという呼応が見られる[12)]。

これらを見ると呂伯奢殺しと陳宮の最後は、作者によって内容が呼応しあうように注意深く作られ、対になる話であことが分かる。そう考えるなら、県令陳宮と曹操の

出会いは、単に呂伯奢殺しの発端であるばかりでなく、二人の長い因縁の始まりとしての意味も持つとみなすべきであろう。

---

1) 最近のものには次のようなものがある。
金文京『三国志演義の世界』東方書店　1993、pp. 39-40
井波律子『三国志演義』岩波書店　1994、pp. 12-19
高島俊男『三国志　きらめく群像』筑摩書房　2000（初版は『三国志（人物縦横談）』大修館書店　1994）、pp. 106-10
刘敬圻「关于『三国志演义』的研究方法」『文学评论』1984年6期：『明清小说补论』生活读书新知三联出版社　2004所収、pp. 185-87
2) 『三国志』「武帝紀」中華書局　1959、p. 5
3) 『晋書』「王沈伝」中華書局　1974、p. 1143
4) 『世説新語箋疏』中華書局　1983、p. 285
5) 『華陽国志』によると陳寿が『三国志』をあらわしたのは、晋が呉を平定した後に書かれたとある（『華陽国志校注』巴蜀書社　1984、p. 849）。
6) 二宮フサ訳『ラ・ロシュフコー箴言集』岩波文庫1989、p. 33
7) 『三国志通俗演義』新文豐出版公司　1979、1, 62b-66a。
8) 『三国志』「呂布伝」p. 229
9) 『元刻讲史平话集』北京图书馆出版社 1999、第五冊25ab。
10) 『三国志通俗演義』4, 69a-70a
11) 『三国志演義史伝』関西大学出版部　1997、2, 59aも、ほぼ同文がみえる。ただし本文として扱い、位置も少し後になっている。
12) 毛宗崗に「中牟縣初遇時、曾談及老母妻子。此處遙應前文」という指摘がある。『三国志演義』上海古籍出版社　1995、p. 208

（筑波大学大学院人文社会科学研究科）